



最初の最初

まず初めにお願いしたいのは、もしも鳥弥三にご来店いただく機会があっても、ここで読んだことはキホン、内緒にしてください。実は主人に黙って書き始めたもので・・・。

私にとっては真実でも彼にとっては違うかもしれないし、まあ、なんかイイ顔はしないと思うんです。

とは言っても、特段、ものすごいことを書くわけではないんですが。

えっ？言わなくてもバレるだろうって？

・・・そうですね。彼が現代文明に追いついたら、そういう日が来るかもしれません。

まあ、早く見積もっても5年や10年はかかるでしょうが。

では私たち夫婦の円満の為にそこんトコロ、くれぐれも、くれぐれも、よろしくお願ひします・・・。

あ、あとこれだけは言っておかないと。

これはノウハウ本ではありません。そういう趣旨では読まないでください。

よろしくお願ひします<(_ _)>

ことの始まりは・・・

結婚した時、主人はサラリーマンだった。

それが結婚して半年もたたないうちに、「会社やめたい」と言い出したのだ。

でも初めから居酒屋をやりたかったわけでもなく。

「オレ、国連の職員になりたい」

と、きた。

国連の職員なんて一介のサラリーマンの転職先にしてはハードル高すぎ、とか、大体、英語しゃべれたっけ？ とか、私の中の常識は、ありえない、サインをピカピカ点滅させてたが、本人はいたって真面目。

「英語しゃべれないとムリだよ」

と、私。

「柔道（主人は有段者）できれば大丈夫じゃないか？」

と、主人。

国連職員に一芸粋があるなんてきいたことない。

でも、「ムリだよ～～」と言っても聞きやしない。

結局、本人が本屋で調べたら「試験が英語だった」とかで、あえなく玉砕。

次に言い出したのが、

「オレ、海外青年協力隊になりたい」

それ、職業じゃないし。大体、私はどうすればいいわけ？

「そういうのは結婚前に行くもんだよ」

で、玉砕。

その次に言いだしたのが、

「ヘリコプターのパイロットになりたい」

だった。

ここまで来ると、まるで小学生の「将来の夢」のよう。

この時、主人は齢30なんだけど。

心は少年のまま、なのね。・・・迷惑な。

「ヘリコプターのパイロットってね、国内で免許とるには大金が掛って、比較的安価なアメリカで取るにしたって、1000万くらいかかる、って話（当時）だよ。だいたい、無線で雑音の入りまくった英語が聞き取れるの？」

と、至極現実的な意見を言う私。

「ラジャーって言っとけばいいんだろ？」

対して、主人はそうのたまった。

・・・死ぬな。確実に死ぬ。免許取る前に絶対、死ぬ。

「・・・ヘリコプターのパイロットって、仕事無いんだって。バイトでタクシートの運転手とかしてるらしいよ。」

で、この話はボツになった。

そしていよいよ、次に主人が持ってきた話が、

「オレ、居酒屋やりたい」

だった。

もしかしたら、最初からこう言われてたら反対してたかもしれない。

でも、ここまでがここまでだっただけに、その話はまっと一に聞こえた。

それなら出来るかも・・・とってしまった。

なによりその時、主人は会社にすごくストレスを感じていたらしく、つらそうだった。
無理して会社勤めするほど人生長くない、とってしまった。

・・・正解だったかどうか、未だによくわからない。

焼き鳥チェーン店の門をたたく

主人が居酒屋と言いだしたのは、本屋で「サラリーマンをやめてよかった」という本を見つけたからだった。

それは「脱サラして、焼き鳥居酒屋やりませんか？」という焼き鳥チェーン店の勧誘本だった。それまでの破天荒な進路に比べれば、地に足がついた進路に思えた。

「・・・いいんじゃない？」

私がそう言ったのが春。店を出したのがその年の年末だった。

直情径行の主人と、思い立ったが吉日の私の組み合わせだと、何事もものすごいスピードで進行するのだ。

まず、主人はその焼き鳥チェーン店の本部に面接に行った。

気合いと根性の体育会系でそこその資金を持ち合わせていた主人は、本部の人に気に入られ、話はとんとん拍子に進んで、会社を辞め次第、そのチェーン店で修業することになった。

それから店を出す場所を探した。

一応、自宅周辺の不動産屋めぐりをして物件を見て回る。

でも、私も主人も物件の良し悪しの基準がよくわからない。

どれも良さそうで、どれもダメそうに見えた。

結局、チェーン店の本部が紹介してくれた場所に落ち着いた。

それが現在の鳥弥三の所在地だ。

そして初夏、主人は修行の旅に出た。

横浜と奈良と大阪の店に一月づつ、計三カ月の修行の旅だった。

修行に行く

主人の修行は過酷だったようだ。

曰く、

「（割り当てられた）部屋が汚い。布団がじめじめで気持ち悪い。寝る時間がない。」

が耐えられないワースト3だったらしい。

キホン、おぼっちゃまなので週一の休みは「こんな汚い部屋にはいられない。ホテルをとってくれ」ということになり、私は毎週毎週、ホテルに予約を入れ続けた。

それでもきつかったのはホントのようで2カ月ぶりに大阪で会った主人は別人のように痩せていた。

余談だが、その後、店がオープンし、主人は不摂生がたたって20kg以上太ったが近年ダイエットしてまた20kgくらい痩せた。

新陳代謝が活発なアスリート系の身体は太るも痩せるも自由自在らしい。

でもその理屈を一般人の私に当てはめようとするのには閉口する。

普通の人ね、そんなに簡単に痩せられないんだよ・・・（泣）

主人が修行に行っている間、私もそれなりに忙しかった。

会社勤めをしつつ、本部との連絡とか、不動産関係の手続きとか、業者との打ち合わせなどをこなし、さらにチェーン店のひとつに通いで仕込みの修行に行った。

そこではた、と気づいた。

すでにいい年の大人だった私は、結婚するまで料理らしい料理を作ったことがなく、つまり料理歴数カ月。

これから食べ物屋をやろうという人間が、もしかしてまずいのでは？

包丁の持ち方から指導され、やば〜い、と思ったが、もちろん遅きに失していた・・・。

不安・・・

賢明な読者はお気が付かれたかと思うが、よくも悪しくも、主人は一般のモノサシでは測れない発想をする。

書き忘れたが物件探しの時、彼は大真面目にこう言った。

「日本地図を広げて、目をつぶって指差した所に店を開こう」

もしも私がRPGのヒロインだったらこの意見に賛成出来たかもしれない。

でもこれから店を営んでどうにか生計を立てていかなければ、という現実には直面している身ではとても賛成出来なかった。

そして、不安になる。

・・・こんな夢見るユメオくん、果たして店が経営出来るのだろうか？

一応、C大の経済学部を出ているはずなのに、なぜこんなにファンタジー???

しかも私もこの業界どころか、調理にも縁遠い人生を歩んできたし。

・・・この感覚。

覚えがあった。

その昔、「私は英語がしゃべれる。だってECC（英会話学校）に通って勉強したもん♪」と思いきいで、たった1人で降り立ったロサンゼルス空港。初めてのアメリカ。

気合いを入れて、インフォメーションでタクシー乗り場を尋ねた。もちろん、英語で。

確かに私の英語は通じた。通じたけど・・・想定外なことに相手の英語が聞き取れなかった！

「・・・pardon？」

と3回言ったら、でっかい黒人のおじさんが私の手を握ってタクシー乗り場まで連れて行ってくれた。

あの、しまった、早まったかも、やばい～、という感覚。

そんな私のキモチをよそに、主人はいよいよ修行を終え、怒涛のごとく開店へと事態は流れていった。

OPEN!

私は主人の転職に際して、「まあ、これなら実現可能じゃないのか」という観点でしか、判断しなかった。

他の仕事はともかく、自営で商売、ということになれば否応なく私も一蓮托生の運命であるということをつっかり失念していた。

だから、自分の適性とかまったく考えていなかった。

・・・大きな誤算だったと思う。

1996年末、とうとうお店のオープン日を迎えた。

それまで業者との打ち合わせや細々とした買い物、さまざまな手続きに忙殺され、なにもかも初めて、の興奮状態のまま、雪崩れ込んだ。

何一つ完璧に準備出来たという実感もなく、これでいい、という確信もなく、わけわかんないけど、とにかくGO！

始めるんだ～～！！と、ただただ勢いに乗ってのスタートだった。

オープン当日は、焼き鳥チェーンの社長さんや重役の面々、バックアップしてくれるビール会社の担当さん達が集まってオープン祝いを兼ねた宴会を開くのが、このチェーンの恒例だった。

主人は一生懸命焼き鳥を焼いていた。

私はバイトの子たちとホールや洗い場を担当した。

目の回る、とはこのことね、という忙しさ。

そういう仕事だよ、という洗礼だった。

次の日からは、ノンストップのルーティンワークが始まった。

このチェーンの教えは「オープン3カ月は店を休むな」だったので、生まれて初めて休みのない仕事を経験した。

ランナーズハイ、というのがあるけど、ワーキングハイ、というのも確かにある。

精神的にはずっと興奮状態だったような気がするが、反して体はボロボロになっていった。

一日10時間以上の立ち仕事をいきなり始めるというのは、特に運動の習慣がない私にはかなりのダメージだった。

でも主人は3カ月修行してきたし、もともと体力があるので私ほどはしんどくなさそうだった。

見るからにアドレナリン全開、という顔で鼻息が荒い。

体力勝負でぐいぐい押していくようなところがあるので、確かに主人には合っている仕事のようだ。

主人を気に入ったチェーンの幹部たちの目は確かだったのかもしれない。

・・・私の適性までは見てもらえなかったけど。

それまで私は接客業を長くやっていたので、接客には問題がなかった。

仕事の内容も家事の延長と言えれば延長のような仕事なのでとりあえずこなせる。

が、体力に大いに問題があった。

私の体力は人並み位だと思う。

特に強くもなく、病弱でもない。

でもこの仕事は人並み外れてハードだった。

そしてこの仕事をこなすに十分な体力を持つ主人には、私の仕事ぶりが生ぬるく見えたようだ。

ケンカになった。

「もっと早く動けっ！間に合わんっ！」

「もうこれ以上はムリだよ～。間に合わなかったら間に合うところまででいいじゃん」（←仕込み中）

「だめだっ！なにがなんでも間に合わせるんだっ！気合いが足りんっ！（←座右の銘）」

「今日一日だけっていうんだったら、がんばるけどさ。毎日だよ？明日も続くんだよ？これ以上がんばったら倒れるよ」

「やる前から気合いの入らんことを言うなっ！死ぬ気で動けっ！」

「やだ」

・・・というような掛け合い（？）がしばしば勃発するようになる。

だいたい主人が言うことはいつも同じだ。要約すると「もっとがんばれ」なのだ。

思うに主人は想像力が欠如しているところがある。

自分は出来るのに相手が出来ないのは手を抜いてるとしか思えないのだ。

体力差とか、能力差とか、まるでわかってない。

人の話を聞く気もないから、未だにわかってないと思う。

対して私も、主人の言うことを聞いてはったり倒れるほど素直ではないので、当然言うことは聞かない。

どれだけ相手が慌てふためき、バタバタ動き回っていても、マイペースを崩さない。

主人の指示よりも自分の中の段取りに従って、淡々と行動する。

・・・そうするとやっぱりケンカになるのだ。

「なんでおまえはオレの言うことをちゃんと聞かん！？」

「聞いてたら倒れるから。限界だから。」

「お客さんを待たせてもそう言うのか！？」（←営業中）

「キャパ越えたお客さんはお断りしようよ。さばき切れないのにお受けしても悪いじゃん」

「そんなことは出来んっ！」

「じゃ、混んでいるので少しお待たせしてしまいますがよろしいですか？って、最初に一言言おうよ」

「待たせないでどうにかするんじゃっ！」

「だから私はもうMAXなの。これ以上はないの」

・・・書いてて哀しくなるほど、ワンパターンの内容でケンカになる。

数年後、私は子どもを産んだこともあるが、仕込みと営業を外される。

子どもがいい加減大きくなった現在も、お呼びが掛らない。

たまに「手伝うよ」と言っても、すごく微妙な顔でほぼお断りされる。

思うに、主人はこの時のことがトラウマになって、私が手伝うとイヤな思いををしているのだ。

あの店で主人の言うことを聞かないのは、私だけだから。

商いは飽きない

「商いはね、飽きないで続けていくことが大事なんだよ」

最初の頃、お客さんになってくれた小料理屋のおばちゃんがそう言っていた。

それはまさしく真理だと思う。

商売はどうしたって波がある。売れたり、売れなかったり、だ。

それでもトータルで、生活していくのに困らないくらいの売り上げがあれば上等なんじゃないか。

なにしろ、ど素人が商売を始めたばかりなんだから。

だが、気合いと根性のスポ根の世界に生きる主人はそうはいかなかった。

主人にとっては売り上げが少ないとは負けること。

惨敗して男を落とすことなのだ。

だから売り上げが少なかった日の落ち込みようといったら、今日は地球最期の日だっけ？ と、思うほど。

主人の激情に晒される倉庫のドアには早々に穴が開いた。

そのかわり、ご飯を食べる暇もないほど売れた日は、天下を取ったような顔をしている。

大勝して男を上げたわけだ。

商売に勝負の感覚を持ち込んで、一喜一憂されるとこっちが疲れる。

いつになったらゆったり構えて大局を見ることが出来るんだろう。

こういところはまったく商売に向いていない男なのだ。

この仕事に向かない

お店を始めて数カ月がたった。

最初の頃のがむしゃらな時期を乗り越えて、なんとなくペースが掴めた気がした頃。

改めて思った。

私って、この仕事に向いてない。

主人はともかく、私は向いていなかった。

なにがダメって「単調な肉体労働の繰り返し」がダメだった。

毎日毎日の、長時間に渡るそれは、私のもっとも苦手とするところだった。

慣れてしまえば、この仕事はそんなに頭は使わない。

肉体労働と頭脳労働のバランスは、大きく肉体労働に傾く。

それが私には苦痛だった。

どっちかというと、頭を使うほうが得意なのだ。

ストレスが溜まり、ぶちノイローゼになった。

そんな時、仲のいい友達が妊娠した。

彼女は不妊治療の苦労の末に身ごもったのだ。

当然だが、うれしそうで、幸せそうだった。

ふと思った。

こんなおもしろくない仕事してるより、妊娠して、彼女と一緒にマタニティライフをエンジョイした方が、人生有意義なんじゃないだろうか。

思い立ったが吉日、が座右の銘の私なので、2か月後には妊娠していた。

不妊治療で苦労した友達、ごめんなさい。

楽しくないマタニティライフ

友達がさんざん苦労して得た妊婦というステイタスをあっさり獲得した私だが、人間、どっかで苦労するようには出来ている。

つわりだ。

24時間、寝ても覚めても気持ちが悪いというのは初めての経験だった。

妊娠したからといって、生活がすぐ変わるわけでもない。

具合の良くない身体で、相変わらずのハードワーク、という事態に陥った。

しかもこの頃は、トマトしか食べられなくなった。

ますます体力が落ちていく。

またしても早まってしまった。

と、後悔しても遅かった。

私の行動もワンパターンなのである。

さらに最悪だったのが、主人だ。

「気持ちが悪い」

と、私が言えば

「オレも（二日酔いで）気持ちが悪い」

と、言う。

「おなかが（張って）痛い」

と、言えば

「オレも（酒を飲み過ぎて下痢になって）痛い」

と、言う。

違うだろう？

妊婦に対するいたわりの言葉はどうした？

挙句の果てにこう言った。

「気合いが足りん」

私はこの言葉を一生忘れない。

だから主人が痔の手術の後で痛みにのたうち回っている時も、風邪で熱を出した時も、二日酔いで苦しんでいる時も、こう言う。

「気合いが足りないんじゃない？」

楽しくないマタニティライフ②

今回はシリアスなお話。

そもそも私が妊娠しようと思った理由は、友達と一緒にマタニティライフを楽しみたかったからだ。

だが、そのそもそもの理由であった彼女が、私が妊娠してすぐ引っ越すことになった。ダンナの転勤で長野に行くという。

ちえっ。

踏んだり蹴ったりだ、と思ったが、本当に踏んだり蹴ったりだったのは彼女の方だった。私と違って細心の注意を払って、苦勞の末に授かった命を大切に大切に育てていた彼女。靴はぺったんこ。引っ越しでも重いものは持たない。絶対に薬の類を飲まない。神経質すぎると思えるほど、慎重に慎重に日々を送っていた。

そんな彼女が長野に引っ越して最初に産婦人科を訪ねた日。エコーに映った胎児の心臓は動いていなかった・・・。

稽留流産（けいりゅうりゅうざん）、と言うそうです。

お腹の中で赤ちゃんが死んでしまったのに、そのままお腹の中に留まっている状態で、痛くもなく、出血もない。

その時の彼女のショックを思うと言葉も出ない。

「ムカムカして、なんにも食べられないんだ〜」

「ええ？そう？私はなんともないけどな」

「え〜？いいな〜、ずるい〜」

彼女と交わしたそんな会話が思いだされた。

思えばあの時から、彼女の赤ちゃんは死んでいたのかもしれない。

妊娠していない状態だから、つわりがなかったのかも。

そんなことを思うと気持ちが真っ暗になった。

なにより彼女の赤ちゃんが亡くなって、私が妊娠しているという状態がすごく後ろめたかった。

つわり。

仕事。

全然理解のない夫。

切望していた赤ちゃんを流産した友達。

・・・マタニティライフは茨の道だった。

波乱万丈の出産

私が妊娠で楽をしたのは、最初だけだった。

初期はつわりで苦しみ、中期はお腹の張りで苦しみ、後期は激しすぎる胎動と重くなったお腹で苦しんだ。

とにかくよく動く子だった。

勢いよいお腹を蹴るので突き出た足をお腹の上から持てた。

そんなのは序の口で、お腹の中で一回転したりする。

内臓がぐるぐる回るようで、ものすごく気持ち悪い。

それでも友達のことを思うとこんな苦労も、苦労出来るだけ幸せなんだ、と思った。

そしてやっとやっと臨月が来た。

この頃になると、もう身体がつらくてつらくて、一刻も早く赤ちゃんには出てきてほしい、この身体を一人で使いたい、と思うようになった。

陣痛らしきものが、毎晩来ては遠のいて行ってイライラした。

この頃の仕事は昼の仕込みだけで、さすがに夜の営業には出ていなかった。

主人のお母さんが手伝ってくれていた。

ある朝、トイレに入ったらはっきりわかるほどお腹が収縮した。

間違いなく陣痛だった。

でも私はけっこうのんびりしていた。

初めての出産は陣痛がきてからが長いと聞いていたから、病院に電話してゆっくり支度をしてタクシーに乗った。

でも、タクシーに乗り込むと話をする余裕がないほど激しく陣痛が来るのを感じて、あれ？と、思った。

病院に着くともっと早く来なさい、と怒られた。

陣痛は5分間隔だった。

お医者さんが内診すると「子宮口が1ミリも開いていない」それで赤ちゃんの心電図を採ると「拍動が弱くなる時がある」それで、つまりこのままでは赤ちゃんがお腹から出る前に胎盤が剥がれて窒息する危険があるから緊急手術が必要だ、と診断されたのだ。

緊急手術！

が一ん・・・

全然そんなこと考えていなかった。

ちゃんと産もうと思って来たのに。

こんだけ苦労して、お腹の中で育てて今更危険とか、受け入れられない。

選択の余地なく、手術を受けることになった。

とにかく無事に身体の外に出すこと。

後のことは後で考えよう。

波乱万丈の出産②

「この間みんなで頼んだ通販の梅干し、全然おいしくなかったね～」

「Sさんがいって言ったんだよ。あの人の言うことは当てになんないわ」

私が緊急手術の為の麻酔医の到着待ちで、戦々恐々としている時、脇で看護師さんたちはそんな会話を繰り返していた。

こっちは生まれて初めての手術で、しかもいきなりで、心の準備がなんにも出来てない不安な気持ちだっていうのに、あまりのデリカシーの無さに泣きたくなった。

私の腕には点滴が繋がれ、陣痛を散らす為の薬が投与されていた。

痛みが遠のき、身体的には楽になったが、気持ち的には人生最悪の恐怖を感じていた。

「・・・麻酔って、痛いんですよね？」

脊髄に注射するからエビのような体勢をとって、と言われ、でっかい注射を構えられた時、思わずそう聞いていた。

「あら。なんで知ってるの？」

と、返されたら普通、ビビると思う。

私はビビった。

だから実際に背骨に注射針が触れた時、期せずして身体ビクッと震えてしまった。

「動かないでっ！危ないっ！」

「麻酔は危険なんですよ！」

「この人はまったく、痛みに弱いんだから」

その場に居合わせた執刀医、麻酔医、看護師に口を揃えて罵倒された。

・・・理不尽じゃない？

わざとじゃないし。

こんなに怖くて、不安な気持ちでいる患者に、もうちょっと労わりの言葉をかけてよ。

・・・とかなんとか思っているうちに脊髄注射は終了し、一瞬で下半身の感覚が無くなった。

帝王切開という手術は、手術自体はすごく簡単なんだと思う。

手術が始まって、甲高い産声が手術室に響くまで5分もなかった気がした。

よかった・・・。

ちゃんと産まれた・・・。

そう思っているうちに意識が無くなった。

やっぱりさっきの麻酔、ちょっと容量が多くなっていたようだ。

波乱万丈の出産③

生れた子は2700gの女の子だった。
遺伝ってすごい、と思わせる面立ちだ。
いろいろなパーツがいろいろな人に似ていた。
なんか、不思議な生き物に見える。

でも。

出産は赤ちゃんを産んだら終わりっ・・・ではなかった。

陣痛で苦しまなかった分、私は出産後に苦しんだ。
帝王切開ってつまりお腹を切ることなのでそれなりの傷が残る。
その傷と子宮の収縮の痛みがダブルで襲ってきた。
おまけに子宮の収縮が悪くなるとかで、痛み止めをあまり使ってもらえない。

「痛いんですけど」

「痛くていいのよ。効いている証拠よ。」

子宮収縮剤が入っているとかがいう点滴を換える看護師さんはにべもない。
病院に入院して、こんなにお医者さんも看護師さんもいっぱいいるのに、この痛みをどうにもできないとは。
私は静かに怒っていた。

おまけに、やっぱり手術の時の麻酔は分量が多過ぎたようだ。
突然高熱が出て、丸一日、身体の震えがどうにも止まらなかった。

そんなに体調最悪だったのは出産後3日くらい。
後は、じっくり生れたての我が子を鑑賞する暇もない、ハードな入院生活が待っていた。

産婦人科は新米ママに赤ちゃんを育てる具体的なノウハウを伝授する場でもある。
おっぱいのあげ方。げっぷのさせ方。おむつの交換の仕方。洋服の着せ方。おふろの入れ方。
授業のようにびっちりスケジュールが組まれていて、ベッドに横になってのんびりテレビを観る暇もない。

それをしていたのは主人だ。

個室だった私の病室にお見舞いと称して毎日きてくれるのだが、することと言えば、豪華なわた

し用の病院食を一人で平らげ、私のベッドに寝っ転がって大画面のテレビをのんびり観賞していた。

太平楽な人だ。

子どものいる生活

なんかマタニティ日記になっている気が・・・。

居酒屋の回顧録を読みに来た方、すみません。

この辺から、本道に戻っていきます。

生れたての赤ちゃんと一緒に生活が始まったワケだが、最初は昼も夜も無く3時間おきにおっぱいとおむつ替えをしなければならない。

寝不足で死にそうになった。

おまけに家には私と赤ちゃんしかいないので、赤ちゃんをおいて出掛けるわけにもいかず、かといって生れたての赤ちゃんを用事もなく冬空に連れ出すわけにもいかず、完全に世間から隔離された。

これはびっくりするほど孤独なことだった。

育児ノイローゼにはなるべくしてなるのだ。

世間の皆さま、赤ちゃん連れのママは社会的弱者ってホントですよ。優しくしてね。

さて、ウチのダンナは優しくかったかというところ・・・。

彼の優しさは、店の仕事を当分手伝わなくてもしょうがないな、ということ容認することで使い果たされたようだった。

いや、オレの面倒をみるのは二の次でもがまんするか、というおまけもあったかもしれない。

その分、お手伝いに来てくれたお姑さんは限りなく優しくかった。

なにとはともあれ、私はお姑さんだけには最高に恵まれたと思っている。

お姑さん、ばんざい。

お姑さんは私の代わりにお店も手伝ってくれた。

この頃のお店は2~3人のスタッフで切り盛りしていたので、たった1人も重要な戦力だったのだ。

私の代わりに、とろいだの勘が鈍いだの、遠慮なく息子に罵倒されたであろうお姑さんには、心から同情する。(涙)

うるさくて眠れない

「うるさくて眠れんからどうにかしてくれ」

子どもが生まれて少し落ち着いた頃、ダンナからこういうクレームがついた。

50㎡のマンションで、乳飲み子に対しての騒音問題が勃発した場合、解決策など数えるほどだろう。

「耳栓すれば？」

「耳栓が気になって眠れん」

「じゃ店で寝れば？」

「寝床が変わると眠れん」

「じゃあ可能な限り実家に帰るよ」

「そうしてくれ」

今じゃ実家に帰ろうとすると機嫌が悪くなるくせに、この頃は実家に帰ってもらいたくてしょうがなかったのだ。

そんなこんなで、週の半分は実家暮らしになった。

この頃はお姑さんもお手伝いを終えて帰り、店には新しいバイトが入っていた。（もっと早くこうしていればよかったのに）

残りの週の半分は、朝起きたらすぐさま子どもを連れてマルイのキッズコーナーに通った。

だんなが店に出るまでの数時間を、ここでミルクをあげたりおむつを替えたり遊ばせたり買い物したりして過ごすのが日課になった。

マルイのキッズコーナーは当時、出来たばかりで新しく、おむつ替えコーナーも授乳コーナーもピカピカで充実していた。

マルイ、ばんざい。

時々、場所をイトーヨーカドーのキッズコーナーに代えた。

子どもが6カ月になるとベビースイミングに週3日せっせと通った。

そうするとママ友が出来て社交生活が戻ってきた。

午後になって、ダンナが店に出る頃になるとお弁当を持って子どもとお店に行き、仕込みを手伝った。

お店では私の実の母親が仕込みを手伝ってくれていたの、本当に家族経営状態だった。

今考えると

今考えると、この頃は華だったな～。

なんせ、子どもを通して初体験することが目白押しだった。

ベブースイミングも、子どもと公園で遊ぶことも、子どもを間に挟んだママ友との付き合いも当然だけど子どもがいなくちゃ出来ない。

子どもというワンクッションを挟んで世界を観るのは新鮮だった。

私にとって子どもって自分のアバターみたいなものだった。

よちよち歩きだして、行動範囲が広がるとこっちの行動範囲も広がって、おお、という感じだった。

今じゃ、この頃のかわいさは微塵も残っていない娘だが、3歳まではなにをされても腹が立たなかった。

子どもは3歳までに人生のすべての親孝行をしてくれるって、本当かも。ウチの場合は。

こういうとウチの子は稀にみるいい子のように見えるけど、けっしてそんなことはない。

むしろ稀にみる育てにくい子だった。

初めての子で比較対象が出来ないから、こんなもんか、と思って育ててしまったが。

寝グズ（1時間）、夜泣き（一晩に2～3回）、起きグズ（30分）を毎日繰り返す、気難しく痲痺持ちで、ガンコ。

おまけに無駄に体力があり、暴れだすと抑えきれないし、延々と泣き続け、暴れ続ける。

実家に帰るまでに、何度電車を降りたことか。

1時間の道のりが倍はかかった。

よそ様の子が大人しく抱かれたり、座ったりしているのを目にすると、奇跡のようだと羨ましかった。

今でも、T子の暴れん坊レジェンドとして、数々の逸話が語り継がれている。

思いかえすと大変なことばかりだったんだけど、全体としては楽しかったんだよね。

少なくとも、店で仕事手伝ってた時よりよっぽど充実していた。

税務調査①

「後は動かぬ証拠なんです」

まっとうに生きてきて、こう言われる機会はそうそうない。
というか、私は無かった。

だがついに言われてしまった。
刑事にではない。税務調査官にだ。
けっこうショックだった。

以降、刑事もののドラマを観ていると、追いつめられる犯人に感情移入してしまってハラハラドキドキする。

これってPTSD？
税務調査でそんなものになるとは、世の中侮ってはいけない。

なにが言いたいかというとな。
お店をやったりして自己流の会計処理をしてると、思わぬところで足元をすくわれるよ、と言うこと。
自戒を込めてしみじみ思う。

税務調査は15年お店をやってて、2回目。
前日も思ったけど、税務調査って性悪説に基づいて行われている。
なにか悪いことをしているに違いないから暴かなければならないのだ。
だから「後は証拠」なのだ。

でもね。

このセリフはひと月半の調査の後に発せられた言葉だよ？
うちみたいな小さい店、調べるトコなんかたかが知れてる。
そこを税務調査のプロがそれだけの期間調べて出たセリフが「後は証拠」ってことは、証拠が出てないってコトでしょ？
証拠がないから出ない、というか、シロだから証拠なんてない、という発想をしないのがフシギ。

これでなんにもなかったら「調査は終わりです」で終わるのか？
私のPTSDはどうしてくれる？

国家権力に対する一市民のなんという非力さ。

せめてものあがきにその一部始終を記録に残すことにしました。

税務調査②

ここまできてナンだが、もしや税務調査のなんたるかをご存じない方もいらっしゃるかもしれないので一応解説する。

商売をやっていると毎年一回、確定申告をすることになる。

いくら稼いでいくら費用が掛ったから、いくら収入があり故に税金をいくら納めます、という申告を自分でするのだ。

その申告が正確に行われているかを時々税務署がチェックしにやってくる。

そのチェックを税務調査と呼び、人々に忌み嫌われている。

多くの場合、それはえげつなく行われ、ちょっとでも隙があれば追加で税金を徴収しようするからだ。

それは例えるなら狩りにおける草食動物と肉食動物の関係だ。

隙をみせないこと以外、草食動物に対抗手段はなく、国家権力という伝家の宝刀を振るう肉食動物の絶対的有利に事態は推移する。

これが好きな人はいないだろうが、残念ながら日本で商売をしている人はすべて彼らの獲物とならざるを得ない。

そして――。

11月のうららかなある日、隣の奥さんと楽しく井戸端会議をしている時に彼らはやってきた。

事前の連絡とかはない。

彼らに言わせれば現金商売をしているところにはそうするのが慣例だとか。

後で知ったがそうすることの是非になんら法的な裏付けは、ない。

言ってしまうえば勝手な言い分だった。

警察だ、税務署だ、と突然言われれば、普通びっくりする。

私もびっくりした。

ダンナにいたってはキレて、職員の人に食ってかかっていた。

さすがに全然生産的ではないので、止めた。どうどう。

川崎北税務署からやってきたN氏とY氏はそんな状況には慣れっこなのだろう。

極めて冷静沈着に「お財布の中身を見せてください」と言った。

この発言も非日常的。

一生の中でそう何度も言われるセリフではないよね。

スーツ着た男二人にくそまじめな顔で「お財布の中身を見せて下さい」だよ？

見せたけどさ。

後で調べたらこれも法の裏付けはなかった。くそ。

根が正直なので、こういう時、ソンをする。

その日は、お財布の中身を確認して、昨日の売り上げを確認して、次回までにこの書類を揃えて置いて下さい、と言い渡されて、手仕舞いとなった。

かくて――。

平和主義の私としては極めて不本意ながら、戦いのゴングは静かに、だが確実に、鳴った。

税務調査③

一週間後――。

うららかな小春日和に2人組の税務調査官はやって来た。

前の晩は大変だった。

屋根裏に無造作にしまいこんである伝票を発掘し、彼らのリクエストに従って年度ごとにまとめ、ちゃんと全部そろっているか確認した。

伝票を入れてある袋が（店をついたらしく）油だらけだったのできれいなものに入れ替えた。

タイムカードも見つけ出し、申告と額があっているか一覧表を作った。

なんだかんだでほとんど徹夜だった。

ねむい・・・

一年分の書類がほぼゴミ袋1つ分もあるので、ゴミ袋3つと年代物のパソコンを携えて彼らと対峙する。

「パソコン、開きますか？」

私の問いかけに彼らは目配せし、小柄な方のN氏がおもむろに口を開いた。

「いえ、その前に。犬を飼っていらっしゃるんですね。ぼくの実家も犬を飼っているんですよ。でも、フィラリアにかかってしまって大変なんです。」

「・・・はあ。」

脈絡を思いっきり無視して、いきなりペットの話が始まった。

実に実に不自然で、わざとらしい話のふり。

いったいなんのこっちゃ、と思っているうちにも彼の話は続く。

「散歩に行っても息が切れるみたいで寝転がっちゃうんです。ちゃんと薬を飲ませておけばよかったんですが、かわいそうなことをしてしまって・・・」

う～ん、それはかわいそうだね。

予防しておかなかった飼い主の責任だよ。

でもさ。

なぜその話をこの場面でするのかな？

後で知ったがこれもれっきとした調査の一環だった。

調査のさわりに軽い話を振って相手の警戒心を解いたり、調査の糸口にするのだそうだ。

ゴルフの話をふられて、新しいクラブを買った話をしたら、後で調査官がゴルフ店に調査に行ったという事例もあるそう。

そういう趣旨にしても、フィラリアを患う犬の話ってどうよ？

どんな糸口を見つけないのか、意味不明。

センスがないのか、演技力に欠けるのか。

寝不足の頭には、判りにくいパーソナリティだ。

税務調査④

「じゃ、会計ソフト見せてください。」

どんなに不自然でもマニュアルを遵守したいらしいN氏は、彼の中でフィラリアの話に一段落つけて、税務調査に話を戻した。

なんなの～、この人。

研修中？ペーパー？仕事出来ないだけ～？

という疑念が湧いたが、税務調査なのだからと気持ちを切り替えて会計ソフトを開く。N氏はあっちこっち触った末に、「excel」という表示を発見しデータをコピーしだした。

この時も、そういうもんかと思過ごしたが、本来はこの行為も断れるそう。

「持ち帰らないでここで見てください」と言えばいいんだって。

知らないって、本当にソンだよな～。

それからは会計ソフトのチェック、領収書のチェック、通帳のチェック、伝票のチェックが昼食を挟んで一日中、二人がかりで行われた。

ちなみに昼食は外に食べに行って、また帰ってきた。

ダンナは仕事に行ってしまったので、私が一日中付き合った。

時々、これはどういう意味ですか？と質問が挟まれる。

でも、二人で一日かかったってとうてい3年分は調べきれない。

どうするのかわかったら、とりあえず1年分の伝票を持っていくと言って二人で分担して持って帰った。

1年分でも相当重いよ。御苦労さま。

税務調査官って、結構肉体労働もするのね。

あ～、これで終わってくれないかな～。疲れたよ～。

と、思ったがまだまだこんなものじゃなかった。

数日後、N氏から電話があった。

「今年分も参考に見たいので、伝票と領収書見せて下さい。」だって。

これもさあ～、書くのも疲れるけど、まだ確定申告もしてない分を見せる必要はまったくないんだって。

それなのに、わざわざ税務署まで持って行っちゃったよ。ちえっ。

この頃から、遅まきながら税務調査のなんたるかをインターネットでチェックし出した。
そうしたら、今どきは税務調査の相談員がいて、不正な税務調査や納得いかない税務調査を相談出来るらしいので、早速電話してみた。
それは納税者支援調整官という。

「あの、事前連絡ナシで、税務調査に入るって納得いかないんです。」
「まあ、でも現金商売なさっている方にはよく行う手法なんですよね。」

「確定申告前の伝票見るって、ひどくないですか？関係ないですよね？」
「過去の分のデータと比較したいんだと思いますよ。」

ここまで聞いて腹が立った。
全然、納税者を支援する気がなくせに、どこが納税者支援調整官？
税務署の立場を解説、もしくは弁護してるだけじゃん。
国税局が建前だけで作った役職、ミエミエ、バレバレ。
意味ナシ。税金の無駄。

とどめに彼はのたまった。

「まあ、私も所詮は国税局の人間ですから」

自分で認めちゃったよ。
意味ないって。建前だけの仕事だって。

「あ、でも、なにか困ったことがあったらご遠慮なく連絡下さい。」

で、また「税務署の立場」を説明する気なんだろうか。
頼れるわけないじゃん。

結局、役人の暗部を見ただけだった。

税務調査⑤

読んでくださってる皆さま、お久しぶり。

いつの間にか季節は春爛漫の4月。

今日は桜、満開です。

確定申告、その他諸々で、大分、更新が滞りましたが再開します。

前回、納税者支援調整官が空振りだった話をしましたが、その後、今度は国税局HPの「お問い合わせ」にメールしてみました。

内容は前回のもの（支援調整官に言ったやつ）＋支援調整官の苦情＋ネットで知りえた税務調査の制法上の不備etcです。

どんな返事が返ってくるかな～、とちょっと楽しみにしていたんですが、皆さん、どんな返事だったと思います？

なんと！

びっくりすることにノーリアクションだったんです。

ノーリアクション。

つまり返事ナシ。完全無視。

自治体だってね。

「区長の部屋」とか「知事の部屋」とかにメールすると打てば響くように返事くれるよ？

「ウチの前の街路樹の枝が窓に突き刺さりそうです」ってメールしたら、次の日にはチェーンソーを持った人が来て、枝をばっさり大胆カットしてくれたよ？

なのに。

納税者を無視ですか？

税金は力いっぱい徴収するけど、「お問い合わせ」は無視ですか？

返事する気がないなら、「お問い合わせ」コーナーは作らないでください。

腹が立つだけです。

私はこの一件で国税局のスタンスを思い知った。

国税局はお代官様で、納税者は年貢を納める農民なのだ。

直訴はご法度。

磔獄門にならないだけありがたく思え、という封建制度が今も続いているのだ。

ショックだし、腹も立ったが他に方法もないので、粛々と税務調査は継続された。

だが、季節は月が変わって12月。

飲食店にとって一年で最大の繁忙期だ。

税務調査が来たのが11月の後半だったんだから、この時期にかかってくるのは自明の理。

こうなると、いやがらせしてるんじゃないかと思えてきた。

税務調査⑥

12月に入ってすぐの頃。

「ちょっと伺いたいことがあるので、今度お邪魔します。その日程なんですが・・・」

というTELがN氏から入った。

私は言葉通りの意味でしか理解しなかったが、これはつまり「チェックに引っ掛かりました。」という意味だったらしい。

やって来た税務調査官2人組は、まとめたデータを手に自信たっぷり。
余裕と言うか、妙に優しげで寛容な態度が鼻につく感じ。
今から思えば勝利（つまり修正申告で追徴課税が取れる）を確信していたのだろう。

エクセルのデータを見せながら

「ここ、売り上げが不自然にまとめて入力してありますよね？どうしてですか？」
「・・・さあ？」

なにしろ、2年も3年も前に入力したデータだ。
いきなり聞かれたって本当に判らない。

「判らないと困りますね。じゃあ、ここなんですが、この毎月20万の仕入れの領収書が見当たらないんですがお持ちですか？」
「・・・え、なにこれ？」

このデータには絶句した。
ものすご〜く不自然に、最後にまとめて毎月20万ずつ、仕入れ科目に計上がある。
確かに自分で入力したには違いがないがトンと覚えがない。
これで引っ掛からなかったら、確かに税務調査官は無能と言えるだろう、と言えるくらいの判りやすいでっかい穴だ。

一瞬、頭が真っ白になった。
その穴のでかさ、それをまったく覚えていない自分にショックを受けて。

「これは、領収書がないと認められませんよ。20万×12カ月で240万ですから。それから、このタイムカードなんですが・・・」

と、N氏の話は続いていたが、一瞬、自我喪失。
全然、耳に入ってこなかった。

「・・・すみません。本当に、色々、覚えがないので、とりあえず保留にして、思い出す時間を
いただきたいんですが・・・。」

茫然自失状態で、それしか言えない私に調査官二人組は顔を見合わせてにんまり。
思いっきり勝利を確信したらしい。

「じゃあ、思い出したら（誤魔化していると自白する気になったら）ご連絡下さい。なるべく1
週間以内をお願いします。（追徴確定な調査を）だらだら長引かせても仕方ありませんから。」

前回の残り、2年分の資料を手に意気揚々と引き上げる刹那、Y氏はそうのたまった。

税務調査⑦

税務調査官が返ってすぐ。

私は未だショックから立ち直れないまま、資料を見直し始めた。

有罪確定の犯罪者のような言われようにもショックを受けたが、指摘を受けたほとんどに本当に覚えがないのもショックだった。

どんなシゴトしてたんだ～、私ったら。

こんなにすっぱり覚えてないなんて、ボケが始まったのか???

だが資料を見直し始めてすぐに、指摘を受けたすべてに説明がついた。

まとめて会計ソフトに入力されてた売り上げは、その元にしたエクセルのデータが古いフォーマットで一部削除されていたものを後から気が付いて入力したのであり、20万の領収書のない仕入れは、ネットショッピングでカード引き落としの分を（申告期限ギリギリだったので）めんどくさがってものすごくざっくり入力したものであり、タイムカードの指摘は営業ではなく仕込みで使った人件費だった。

嬉しくてほっとして、1週間以内どころかすぐ税務署に電話してN氏に話した。

N氏は勝利を確信していたところに、思わぬ反撃を受けた為だろう、電話口でケンカ腰だった。

「すみませんが、耳が痛いのもう少し小さい声でお願いします。」

と、言わなくてはならないほど。

さっきの上機嫌とは打って変わって不機嫌になってしまったN氏だが、こっちだって追徴課税が掛っている。

下手に出てはられない。

「・・・ということで、さっきの疑問は全部答えたと思うんですが・・・。」

「・・・・・・・・。」

「あの、（疑問は）以上で終わりですよ？」

「・・・！終わりじゃないですよ！まだ調査は続けますっ！」

勝手に勘違いして、ますます不機嫌になっていくN氏なのであった。

そして、調査は続く。

税務調査⑧

自信满满だった調査結果に思わぬ水を差されて機嫌を損ねたN氏だが、自己流&テキトーな会計処理に叩けばホコリが出ると踏んだらしい。

今度は会計伝票の連番を突いてきた。

「抜けてたり、同じ番号のものがあつたりなんですか？」

「・・・書き損じて捨てたり、足りなくなってコンビニでコピーしたりしました。」

これはダンナの仕業だけど、自由すぎて恥ずかしかった。

ここだけは税務調査官に申し訳ない。

こんなテキトー、調べにくいつたらないだろう。

ちなみに現在はPOSシステムを導入しているので、スケスケの透明会計だ。

イロイロ誤魔化したい店なら、そんなもの、導入しないと思わない？

税務調査の半年以上前に導入済みなんだから、そういうところも考慮してもらいたいもんだ。

次にN氏は店のホームページや今まで配信したメルマガをチェックした。

皆さんはインターネットアーカイブというのをご存じだろうか？

現存しないホームページもURLさえ判れば、過去に遡って検索出来るシステムだ。

税務署はこれを愛用しているらしい。

何年も前のページをコピーしてきて、「ここは休みになってないのに、会計上は休みになってる」と言ってきた。

でもはっきり言って店のホームページはいくつもある。

公式のもの以外で、自分で管理しているものだけでも3つくらい。

その他、よくわからないうちに出来ている、一切自分たちは関与していないものもいくつかある。

そのすべてが実態と合っているわけもない。

自慢じゃないが、更新だってマメなほうでもない。

「更新しなかったんだと思います。」

「お客さんからクレーム来たりしなかったんですか？」

「私の知る限りではないですねえ。」

と言ったら、N氏、ものすごい仏頂面。

思うにこの人は、この商売の割に感情が顔に出過ぎる。

税務調査官としては不利じゃないのかな。

調査を受ける納税者も不愉快だよ。

それからN氏は店にやってきて従業員に聞き取り調査を行った。

だがN氏としてははかばかしい成果は得られなかったようだ。

そうこうしているうちに季節は12月半ば。

忘年会シーズンも佳境に入ってきた。

そうそう税務署にばかり構ってもいられなくなった。

「繁忙期になってしまったので調査は1月にしてください。」

「・・・」

「もうひと月早く、来てもらえればよかったですけどねえ。」

「・・・」

「飲食店に調査に入るのになんで11月の後半なんですか？」

「・・・」

ひとつ、発見した。

N氏は都合が悪くなると寡黙になる。

税務調査⑨

「1月は税務署が忙しくなってしまうんです。確定申告の準備などで。」

じゃ、もうやめようよ。
いい加減、調べたじゃん。

「とにかく、12月はここまでにしてください。」

・・・と言って別れた数日後、N氏は押収した3年分の書類を返却すべく家にやってきた。
上司のH氏と共に。

ここで話は番外編文頭に戻る。

「後は動かぬ証拠なんです」発言だ。

そう。

これはN氏ではなくH氏の発言だったのだ。

私の想像の域を出ないが、N氏は上司のH氏に「非常に疑わしくはあるものの、はっきりした不正の証拠もなく本人たちも認めず、だらだらと長引いている案件」について、年を跨いで調査したくないな～、結果（追徴課税が取れる）が出るか微妙だし、時間ばかり取られてやだな～、というニュアンスたっぷりに報告したのではないだろうか。

それを聞いたH氏が、こんな疑わしい案件を前に不甲斐ない部下を叱咤し、自ら乗り込んできて、調査に対する意気込みのあまり口が滑って「後は動かぬ証拠なんです」発言に結びついたらとみている。

それくらい、H氏は軽い興奮状態だった。

「調査は4月から再開します。」

・・・し、4月！？？？

年どころか年度も越えちゃうよ。

「ええ、時間は関係ありませんから。」

前にY氏が言ってたことと180度違うじゃん。
だったら長引かせても仕方ないんじゃないかったのか？

っていうか、そっちが構わなくてもこっちが構うぞ。
調査中断なんていう生殺し状態で3カ月放置？
その間の精神的苦痛はどうしてくれる？

H氏の言い分にどうにも納得がいかなかったので、彼らが帰った後、税務署に帰署したH氏に電話した。

「なんでまだ調査が終わらないんですか？なにを根拠に調査を続けるんですか？嫌がらせですか？」

最後の「嫌がらせ」という言葉にH氏は反応した。
公務員としては「税務署に嫌がらせされた」という醜聞は噂に立てられるだけでもまずいだろう。

「そんなことは絶対ありません。判りました。どうして調査を継続するのか年明けにでもご説明に参ります。」

そうして。

年の初めの最初のアポは税務署という、うれしくない年明けが決定した。

税務調査⑩

1月の半ば過ぎにN氏とH氏がやってきた。

主人と私で出迎える。

「さっそくなんですが、この20万の資料を見つけられないんです。」

と、H氏。

それは会計ソフトのデータをエクセルに変換してN氏が持って行った資料の中の数字だった。
銀行の出納記録のひとつだ。

でもちょっと待てよ。

今日は調査継続の理由を説明しに来たんじゃないのか？

なんで調査みたいなこと聞いてくるの？

と、思ったがとりあえず答える。

「この間、一緒に通帳持って行きましたよね？」

と、N氏に向かって言うと、びっくり眼のN氏。

持ってっただろうが（怒）

「その中にこの数字は見当たらなかったということです。」

と、H氏。

え〜???

通帳のデータの転載には自信があるぞ。

最後に収支合わせるから、抜かしたり、間違ったりしたら、気が付くもん。

「そんなはずないと思うんですが・・・」

と、言いながら返却された通帳の束をがさごそ。

あった。

目当ての通帳も、税務調査官がないって言ってる数字の記録も。

「このことですよ？」

と、ページを2人に示すと、「あ・・・」という顔のN氏と、部下の凡ミスに渋面のH氏。

「わかりました。それはもういいです。それではこっちのレシートの連番なんですが・・・」

待て待て。

普通、ここで謝らないか？

勘違いで相手にあらぬ疑いをかけたら、謝るよね、普通の人。

H氏はそんなことは思いもつかないらしく、話をどんどん進めてくる。

国家権力しよった人間はここまで傲慢になるんだ。

やだよだ。

20万が不発に終わったH氏は今度はレシートの連番が飛んでると言い出した。

「他に（レシートが）あるはずなんです。」

「ないですよ。持ってかれたものがすべてです。」

H氏はずいっ、と身を乗り出し、語気を強めた。

「いえ、必ず連番で出るからあるんです。それを提出して下さったら、調査を終わりにします。」

「・・・でも、ないです。」

本当にない。

見たことも無い。

「連番がうってあるなんて知らなかったなあ」と、ダンナが呟いていたから、なにかテキトーなことをしたのかもしれない。

「困りますね。それでは徹底的に調べなければならない。銀行とか、近所に聞いて回るとか。」

「あ、じゃあ、そうして下さい。」

と言ったらH氏が嫌そうな顔をした。

脅しだったらしい。

でも、税務署が出せという欠けた連番の部分は逆さに振っても出てこないし、銀行も近所も調べられても特に困ることもない。

調査官とすれば、手間ヒマかかる調査をするより、ここで「自白」してもらいたかったようだが、無い袖は振れない。

「税法では7年前まで遡って調べられることになっています。」

あ、それはやだ。

書類を揃えるのがめんどくさい。

「悪質だと重加算税が加算されることがあります。」

・・・なにそれ、脅し？

脅しだよね。

なんとか「自白」してもらおうと脅してるよね？

ムカツク。

税務調査⑪

もう、いい加減、税務調査ネタは飽きたのだが、終わらないのだから仕方がない。

月日は流れて3月15日。

確定申告の最終日になった。

例年の如く、2~3日ほぼ徹夜で書類を作る。

ここ数年は、毎年こんな感じで切羽詰まってバタバタなのだ。

(だから、カード引き落とし分を全部ひっくるめて適当に月20万ずつ仕入れに振り分けるなんて荒技が繰り出される)

ここでとんでもないことに気付いた。

過去4年分の消費税の計算を間違っていたのだ！

103で割って100を掛けて、消費税額を出すところをそのまま出してしまうという凡ミスで4年分も積み重ねてしまった（つまり数10万単位で多く払っていた）のだ。

・・・ゲッ

こんないい加減だから、税務調査に引っ掛かるんだよ（反省）

でも、調査官たちは今のところ、消費税で申告漏れを指摘しようとしているらしいのに、こんな凡ミスで消費税を多く払っていたら、どうなるんだ？

最悪でもプラマイ0のような気がするんだけど。

・・・あれ？この調査、意味無くない??

なんか話がこんがらがってきた。

う～～ん???(しばし思考停止)

ところで税務調査で、このことは全然指摘されなかった。

あれだけねちねち調べてるんだから、こんな凡ミスはとっくに気づいて無視してるんだろうか？

税務調査の目的は税の徴収であって還付じゃないって証拠？

それとも本当に気付かなかった？

それも間抜けな話だけど。

税務調査は7年遡れるようだけど、還付も7年遡ってくれるのかな？

遡ってくれなければ、こんな身勝手な制度はないよね。

3月16日。

確定申告の翌日に税務署にこのことを聞きに行った。

奇しくも受付にいたのはH氏だ。

「普通は消費税の還付は前年までしか出来ない（やっぱり身勝手な制度だ）んですが、税務調査中に見つけたということにして3年分は出来ると思います。4年分はちょっと・・・わかりませんね（とことん身勝手ではなからうか）とにかく、税務調査でそのことも一緒にやりますから今日は帰って下さい。」

「4月からやるんですよね？いつ頃になりますか？（こうなったら早くやってほしい）」

「4月に入ったらすぐご連絡します。」

「判りました。」

だが、ことはそうすんなりとは動かなかった。

4月になった。

それも20日を越えたというのに、N氏からは何の連絡も、ない。

・・・もうすぐGW始まるんですけど。

さすがにしびれを切らして、こちらから連絡した。

電話口のN氏はのんびりと言った。

「どうしようかなあ、と思ってるんですよ。5月にしようかなあ。」

．．．．ブチッ。

堪忍袋の緒が切れた。